

片山廣子さんのこと

著述家 村岡 恵理

もう十年以上前のことになるが、NHKの朝ドラで祖母村岡花子をモデルにした『花子とアン』というドラマがあった。

貧しい商人の娘の花子が、東京のミッション・スクールで外国人教師から英語を学び、やがて翻訳家となって、戦時下に空襲警報に脅かされながらも『赤毛のアン』を密かに翻訳するというお話。花子役は吉高由里子さん、親友の柳原白蓮役は仲間由紀恵さんが好演した。もちろんドラマなので全てが事実ではない。現に、本当の村岡花子には、白蓮さんの他にもうひとり、片山廣子さんという年上の文学者の友人がいて、花子が結婚後、住居を大森に決めたのも、関東大震災や夫の事業の破綻、愛児の死など、幾たびもの生活の転変の中、文学への情熱は持ち続けられたのも片山さんの影響が大きかったのだが、ドラマでは影も形もなかった。

後日聞いた話では、花子と白蓮のツートップにするか、あるいは片山さんを含めたスリートップにするかは、制作側の最初の大きな懸案事項だったそう。たぶん朝ドラのドラマツルギー上、ツートップが選ばれ、それはそれでよかったと思っている。

でもエッセイスト・クラブの方々には、片山廣子さんの存在は知らないでは済まされないものである。なんて、新米会員の私が鼻息を荒くするのはてんで可笑しいのだが。

1951年に始まったエッセイスト・クラブの、第3回クラブ賞受賞者に、片山廣子さんのお名前がある。作品は『燈火節』。祖母の書斎の本棚に並んでいたこの珠玉の随筆集の装丁を、私ははつきりと思い浮かべることができる。かつてその言葉と思考の清潔な詩情に、一読してすっかり魅了されたのだ。残念ながら私は祖母には何ひとつ似ていない不肖の孫だけれど、以来、ルーシー・モード・モンゴメリとこの片山さんへの敬愛は受け継ぐことに決めたのだった。

片山さんは、外交官の娘として麻布に生まれ、佐佐木信綱門下を代表する歌人として、またアイルランド文学を日本で初めて翻訳した人として知られる。上田敏氏、坪内逍遙氏、森鷗外氏がその翻訳力を高く評価し、菊池寛氏は「当代の日本婦人中、最も学識高き婦人なり」と讃えた。しかしのちに日銀の理事となる社会的地位のある夫を立て、文学はあくまで趣味という建前で、原稿料は一切受け取らなかった。今の若い人には理解しがたい感覚だろうが、当時、一部の上流階級では、妻が働いては「夫の沽券に関わる」なんてことが真顔で言われていたのだ。

42 歳でその夫に先立たれた後、大正末期の軽井沢を舞台に芥川龍之介氏、室生犀星氏、堀辰雄氏らと親交を深め、芥川氏をして「才力の上でも格闘できる女」とまで言わしめた。名だたる文学者たちの憧れや敬意を集めた片山さんは、当然ながら才力だけでなく、佇まいの美しい人だった。それでも写真嫌いでは有名で、現存する肖像写真はたったの3枚。集合写真の時は、い

つの間にか姿をくらましてしまう。専攻のアイランド幻想文学の影響色濃く、本人もどこか神秘的で、霧のヴェールを纏っていたのだろう。白蓮さんとはまた違う花である。

しかし戦後は経済的にご苦労された。ご長男の急逝も彼女の孤独をより高くした。

祖母宛の手紙には「何かしたいけれど齡のことを考えると氣おくれして手も足も出ません。でも、ぼんやりしているわけにはいかないから自分の力相応のことをやってみようと思う」と綴られている。切ない。やむにやまれず、おそらくは初めて生活のためにペンを執り、75歳で初随筆集を刊行した。それが第3回エッセイスト・クラブを受賞した『燈火節』なのである。

この度、22年ぶりに読み返した。つましい日々の暮らしが淡々と描かれているのだが、こちらが22年分歩み寄ったせいか、共感する部分が多く、少しも古さを感じない。それどころか湧き上がるユーモアや感受性の豊かさに改めて感激した。例えば、雑誌が買いたくても買わない、お世話になっている人に贈り物ができない、白米が食べたくても外米にする、庭の椿が枯れかけても今月は植木屋を呼ばない、しかしこれは赤貧とは言わない。多分「赤」ではなく「ピンク色」ぐらいだろう。りんごを食べながら片山さんはそんなことを考えるのである。

ピンク色の世界も片山さんには辛かったであろう。一方で、誰にも、何にも依らず、自立した気ままな生活を、どこか楽しんでいる風なのだ。言葉と知性は彼女の着物である。それは暮

らしがミニマムになっても失われることはなかった。静かな微笑を湛えた晩年の姿が目には浮かぶ。随筆というのは時に鏡のようにその人の在り方を映し出す。もしこの随筆集が出版されていなかったら、ずっと霧のヴェールを纏った人だった。それも素敵だったかもしれないが、『燈火節』で表れたその清々しい姿ゆえに、私は片山廣子さんへの尊敬をあらたにしている。